「子どもたちの人格形成と学校教育の役割」

中野区立中学校校長会会長　津村　慶（北中野中学校　校長）

教員だった頃の２００５年４月から２００８年３月までの３年間、私はパキスタン・イスラム共和国にある日本人学校に勤務していました。当時のパキスタンは、クーデターによって政権を握ったムシャラフ大統領が率いる軍事政権が国を治めていました。日本車と日本の電化製品が高く評価されている親日国で、政権が親米派だったことからも、国籍や人種による差別や迫害を受けることはなく、テロ行為や暴動等に対する危機管理さえ怠らずにいれば、首都イスラマバードでの生活はそれなりに楽しい日々でした。イスラム国家という文化の違いや開発途上国ならではの不便さもありましたが、毎日のように新しい発見があり、新鮮で刺激的な３年間でした。

そんな現地での生活で知り合った日本企業の方の話が記憶に残っています。仕事柄、海外の赴任歴が長くいろいろな国で生活した経験のある方でした。「うちの長男はアメリカで子ども時代を過ごし、現地校に通っていたから性格は完全にアメリカ人です。次男はドイツの小中学校に通っていたので、考え方や振る舞いがドイツの人とそっくり。三男が学校に通う頃には日本に戻って、日本の学校に入れたいんですよねぇ。」という何気ない会話でした。アメリカンスクールに通っていた子はアメリカ人のように育ち、ドイツで学齢期を過ごした子はまるでドイツ人のように育つ。家族は皆日本人で、家では日本の生活を送っていても、毎日のように通う学校や一緒に過ごす仲間たち、生活していく街の環境・文化によって人の根っことなる部分が形成されていくのは、当然と言えば当然のことかもしれません。ましてや小中学校や高校で受ける教育が子どもの人格形成に与える影響はとても大きいはずです。

どこの国であっても、教育で大切にする人としての土台は共通しているでしょう。自分を大切にする気持ちと相手に対する思いやり、正しい言葉遣いと規範意識、人や社会のためになることの大切さや困難に立ち向かう勇気など。それでも、それぞれの国の国民性に微妙な違いやアイデンティティが生まれるのは、何をどのように教えるかの違いや、ちょっとした優先順位と軽重の違いなのかもしれません。そんな僅かな差が明らかな人格の違いに繋がるからこそ、保幼小中に高校を加えた幼少期から青年期までの１８年間の大切さを改めて感じます。人としての根幹部分が形成される重要な時期だからこそ、より良い環境で本当に大切なことをしっかりと学んでほしいと感じます。

私たち教師には、世界的にも評価の高い日本の教育制度の中で、日本人としてのアイデンティティと世界に通じる国際人としての素養を丁寧に育んでいく責任があります。そのためには、決して現状で満足することなく、よりよい環境づくりと質の高い教育を目指して努力し続けることが必要ではないでしょうか。

また「学ぶ」という言葉は「まねぶ＝真似る」からきています。先人たちの偉業や先輩たちの築いた伝統、周りの仲間たちの善い行動を真似ることから学びが始まります。子どもたちが真似る対象には、当然のことながら私たち教師や保護者、地域の大人も含まれます。自分自身が「子どもたちには将来、こんな大人になってほしい。」と思えるような大人でいることが大切な気がします。子どもたちよりも少し前を歩いている者として、私たち大人が改めて襟を正して子どもと向き合いたいものです。

令和５年度　教育功労者表彰式

中野区教育振興会では、中野区の教育に貢献された方を教育功労者として表彰しています。

今年度は、次のとおり表彰式を開催いたします。

※来賓出席予定
中野区長・区議会議長・教育長

日　時　11月10日（金）
　　午後４時

会　場　中野区役所　７階
　　第８・９・10会議室

答　1.エ（40%）2.エ（66%）3.ア（30%）4.エ（4%）5.イ（48%）6.エ（60%）7.ウ（32%）8.ウ（52%）